

まだ明るいなあ……

僕は中堅メーカーに勤めるしがないサラリーマン。  
妻と娘の3人家族のどこにでもいるような中流家庭。

普段はこんな早い時間に帰れないんだけど、  
働き方改革だとかプレミアムフライデーだとか……  
そんなんで今日は日が沈む前に帰宅できそうだ。

でもなあ……世の中、早く帰りたい人だけじゃないんですけどね……  
最近では妻とは家庭内別居状態。

特に理由はないんだけど、デキ婚で14年も一緒に暮らしていると  
話すこともなくなってくる。

とはいえ、外で遊ぶ甲斐性もおカネもないのだけど……

はああ……妻と顔を会わせたくないなあ……

「ただいま…」

返事なんてないと分かっているけど、言ってしまう。  
習性というのは恐ろしい。

「あ、お父さん？ おかえりーん」

ん？ 娘の声がする。  
こんな時間に帰ってたのかな？



「あれ？ 帰ってたの？ 早いね」

「うん、試験期間中だから部活は休みだよ」

この子は娘の真由。 中学2年の13歳。  
真由がいてくれるから、頑張って働いてくるんだよ。  
僕にとって愛おしくて大切な宝物のような娘だ。

「お父さん、のど乾いた？」

「お茶入れよっか？」

「ううん、大丈夫」



真由は親の欲目で見ても、可愛いと思う。  
それに気遣いもできて、人当たりもいい。  
きっと学校ではモテるのだろう。  
聞いたことはないけれど、彼氏もいるんだろうな…

父親としては寂しさを感じたくないけれど  
こうやって女の子は大人になっていくのかもしれない。

「テスト勉強は順調？」

「うん、ちゃんと勉強してるよー」

普通の中学生ぐらいだったら、  
してると言いつつ実際はしてなかったりするんだろうけれど  
真由は本当に勉強をしている。  
一度も勉強のことで叱ったことがない。  
自分がこの子ぐらいの年の頃を思うと、  
不思議なくらいのいい子だ。



「あ、でも2年生になってから  
英語がすごく難しくなったんだよー」

「へえ、過去形とかかな？」

「そうそう！ お父さん、私に教えてよー」

「あはは…お父さんよりお母さんの方が英語できるから  
お母さんから習いなよ」

「え〜ヤダー。お父さんがいいし」

実際彼女の方が若い頃海外旅行をたくさんしてたから、  
ペラペラなんだけどね。

そういえば彼女はどこにいたんだろう？  
僕はきよらきよらとリビングを見渡す。  
キッチンかな？

「どうしたの？ お父さん」

真由が怪訝そうな表情で僕を見てくる。

「あ…いや、お母さんどこかな？って思って」

妻の顔をうかがう情けない夫だなど  
我ながら苦笑してしまう。



「お父さん…お母さんは今日帰ってこないよ…」

真由は悲しそうな顔を見せる。

「ん？ どこか旅行に行ってるの？」

僕は何も聞いていないけれど、

真由は何か知っているのかもしれない。

「うん…まあ…そんな感じかも…」

歯切れの悪い真由の態度を見て、ようやく僕は理解した。

多分どこかの男と出かけたのだろう。

以前から愛人がいるらしいというのは感じていた。

いい気はしないけれど、まあ仕方がない。



「そっか…」

表情に出ってしまったのかもしれない。

真由が慰めの言葉をかけてくれる。

「お父さん、かわいそう…」

「生懸命私たちのために働いてくれてるのに…」

「まあ、こういうのは仕方ないからね」

「なんであんな女のこと、かばうの？」

お父さんは何にも悪くないのに！

「お母さんのことを『あんな女』とか言っちゃいけないよ」

「だって…」

真由は不満そうだ。

「お父さんは私のこと、好きさ。」

突然真由が尋ねてくる。

「ええ、好きさ。」

「愛っっっ。」

「お、お、愛っっっ。」

なんだらうっさ？



「じゃあ、そこに座って。」

「その、そのフローリングさ。」

「うん、いいものを見せてあげる。」

そう言っや、真由は窓に向かいカーテンを閉め始める。  
困ったような表情をしているけれど  
手品でも見せてくれるのかな？



「お父さん…」

「…」

真由は僕の前に立つや、スカートをまくり上げた。  
それだけでも十分驚きだけど、さらに僕を驚かせたのは  
彼女は下着を穿いていなかった。

「真由っ！」





メン...お父さん...見て...

真由...何やってるの...やめなさい...

僕は思わず声を上げちゃったよ...

「お父さん...私の」と愛してるんでしょ...  
だったら見ていいよ...

「ちよっ...そういう意味じゃ...

ブリン

ハッ

ハッ

ハッ

「私…お父さんになら、  
見られてもいいよ…」

真由は顔を赤らませ、震えている。

「真由、ちょっと落ち着いて。

父親の前でそんなこと、

冗談でもしちや駄目だよ！」

僕は頭が真っ白になって、叫んでいる。  
落ち着かなきゃならないのは、僕の方だ。

「冗談じゃ…ないよ…。私は本気」

「真由…」

「お父さんって…

すっごく素敵な男の人だよ。

世界中の誰より…

ななお母さんはお父さんを裏切って…

お父さんが可哀そうだよ…」

「……」

「ねえ、お父さん。

お母さんは今ごろ知らない男の人と

ベッドの中かもしれないよ」

「…」

「でも私ならお父さんを幸せにしてあげられるから」

「お父さん、私の体見て興奮しない？」  
「ちや...まあ...」

座っているから  
真由は気付いていないよりだけども、  
実は僕のペニスは勃起している。  
いくら娘とはいえ、  
ノーパンでスカートをまくり上げられて  
興奮しない男がいるだろうか。

「ネットで調べたら、  
男の人はこういうの喜ぶって」

「それでノーパン？」

「うん♡」

「...もっと興奮させてあげよっか？」

真由は僕を見下ろしながら、いたずらっぽく笑う。

「ちや、もういいから！ やめなさい...」



ピュルルル〜

勢いよく真由の股から液体が噴き出した。

おしっこ??

僕は自分の見ているものが信じられずにいた。

「んっ ふあああ…」

真由は切なそうな声を出しながら、おしっこを続けている。

女性の排尿を見るなんて初めてだった…

僕は目の前の異常な状況にもかかわらず

真由の股から目をそらすことができなかった。

「はあ…はあ…お父さん…いっぱい見て…」

♡♡♡

ドキ

ドキ

ドキ

「一体どのくらいのおしっここの量なのだろう。床には大量の液体が広がり、真由の太ももからふくらはぎも濡れている。」

「はぁ…はぁ…男の人って、こんな見たがるの？」

「真由の息は荒く、目の焦点も合っていない。」

「えっいや…」

「ネットにあったよ。男の人は女の子のおしっこに興味するって」

「…僕は反論できなかった。娘の股からあふれ出すおしっこを凝視していた僕に反論なんてできっこない。」

「やっぱり恥ずかしいなあ…お父さんの前以外じゃあ、絶対できないよ」

「いや、僕の前でもする」とは…」

「だってお父さん、喜んでくれたでしょ？私、お父さんのためだったら何でもするよ」



そう言うや、真由は僕に背中を向け壁に手を付ける。

めくれ上がったスカートの中が丸見えだ。

「ふふ…お父さん、顔真っ赤だよ☆」

平静を装おうとしても、

胸の高鳴りは止まらない。

形のいい白いお尻の中心に、

小さなすぼみが見える。

「中学生の娘のお尻の穴見て興奮してるんでしょ？」

「……」

言い訳を口にしたくても、何も浮かばない。ただただ、娘のアナルを凝視している。

「いいんだよ…お父さん。いっぱい見て。さわりたいなら、さわっていいよ」

「お父さん…」

「お父さん…」

「お父さん…」

「お父さん…」

僕は真由の言葉に促されるまま、彼女の美尻に舌を這わす。

「ひやあああ——ッ！」

真由が目を見開いて、悲鳴を上げる。

「ちよっ！ちよっと、お父さんっ！いきなり舐めちゃうの？」

「あ……めん……っ……」

「ふーん、お父さんってお尻舐めるのが好きなんだね」

ぐうの音も出ない……娘に自分の性癖を知られるのが、こんなに恥ずかしいとは……

「なあ……真由。やっぱりこんなことやめよう。親子なんだから……」

「いまさら？」

私のお股とお尻見て興奮してるのにな？」

真由が僕の股間を見ている。勃起してるのを見抜かれてる？

「お父さん、お股に指を入れて♪」

たろが

ズ  
く  
ん  
っ  
ん

ズ  
ん  
ん

